

## 「全鍍連」 2022年 8月号 いきいき地域

全鍍連情報・国際委員 黒田 優 (アイテック㈱ 代表取締役社長)

### 「めがねのまちサバエ(鯖江)の現況」



福井県はめがねフレーム生産高が全国シェア95%であり、鯖江はその中でも中心地であります。

始まりは、1900年初頭に、農作業ができない農家の冬の仕事として始まりました。その後、次第に専門の製造者がパーツごとの分業することで鯖江のまち全体が大きな工場として、めがね作りが盛んになりました。

1983年頃には、世界で初めてチタン製のめがねを開発、生産することで、世界的めがねの産地としての地位を築きました。その後は、順調に産地は成長してきましたが、1998年頃から中国の安価なめがねを販売する小売チェーン店の展開が始まり、めがね枠とレンズのセットで安価な提供が消費者に受け入れられました。産地は、急激に生産高が落ち込み厳しい時代となり、倒産、廃業により、産地のキャパは大きく減少し、低迷が続きました。

しかし、その後 行政、産地組合、各製造メーカーが一体となり、品質が良く、機能性が高くまた斬新なデザイン等付加価値の高い サバエのメガネというブランドの確立、消費者への認知を高めるため、様々な取組を継続的に行っていました。

その結果、最近では、メディアでの露出( ネット情報、TV 番組での産地紹介)が多くなり、サバエのメガネの認知度は、以前より格段に上がっていると思われます。また、2年前には、イタリアの世界 NO1 のめがね製造・販売会社が、サバエブランドを求めてサバエに大規模な工場を建設し製造を始めました。コロナ禍の中で、一時的には、産地の生産高が落ち込みましたが、現在では、コロナ禍前を超える生産高で推移しています。

ただ、若い人材の確保、原材料、電気、燃料の高騰等多くの課題があります。しかし、地場産業の活性化が、地方の活性化となり、更には、日本の活性化に繋がっていきます。今まで、産地は多くの困難、課題を先輩たちが乗り越えて、今に至っており、これからは、私達の世代が、次なる産地の展望を切り開いていきたいと考えております。

最後に、現在 めがね産業の草創期( 増永五左衛門らの奮闘)を描いた「おしよりん」という映画が製作されております。( 2023年秋公開予定)

機会があれば、是非ご鑑賞頂ければ幸いです。